

ジョン・グリシャム

John Grisham

法律

THE FIRM

事務所



下

白石朗＝訳



新潮文庫

Title: THE FIRM (vol. II)
Author: John Grisham
Copyright © 1991 by John Grisham
Japanese language paperback rights arranged
with John Grisham, c/o Rights Unlimited, New York
through Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo

ほう りつ じ む しょ
法 律 事 務 所 (下)

新潮文庫

ク - 23 - 4



Published 1994 in Japan
by Shinchosha Company

平成六年八月一日
平成七年十二月五日
発行
刷行

訳者 白石朗

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 東京都新宿区矢来町七六一
編集部(〇三)三二六六―五四四〇
電話読者係(〇三)三二六六―五一一一
振替 〇〇一四〇―五一八〇八

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・東洋印刷株式会社 製本・有限会社加藤新栄社

© Rô Shiraishi 1992 Printed in Japan

ISBN4-10-240904-1 C0197

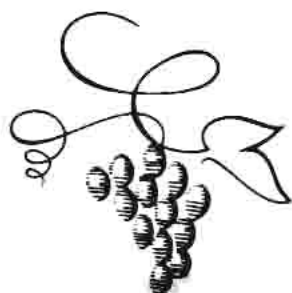
新 潮 文 庫

法 律 事 務 所

下 卷

ジョン・グリシャム

白 石 朗 訳



新 潮 社 版

5316

法律事務所
下卷

主要登場人物

ミッチェル・Y・マクディーア……	〈ベンディニ、ランバート&ロック 法律事務所〉の新人弁護士
アビー・マクディーア……	ミッチの妻
レイモンド・マクディーア……	ミッチの兄
ネイサン・ロック……	〈ベンディニ、ランバート&ロック 法律事務所〉シニア・パートナー
オリヴァー・ランバート……	同 シニア・パートナー
ロイス・マクナイト……	同 マネージング・パートナー
エイヴァリー・トラー……	同 パートナー。ミッチの上司
ラマー・クイン……	同 アソシエイト
デヴァッシャー……	同 保安部長
ウェイン・タランス……	FBI捜査官
ジョーイ・モロルト……	シカゴのマフィアのボス
ルー・ラザロフ……	シカゴのマフィアの幹部
タミー・ヘンプヒル……	私立探偵の秘書

十七の昼間と十七の夜のあいだ、ミッチとアビーのマクデューア夫妻の不安な生活はつづき、そのあいだウェイン・タランスとその一味からの干渉はいつさいなかった。いつもの暮らしがもどつてきていた。ミッチは一日十八時間働き、車で家に帰るとき以外には一刻たりともオフィスをあけなかった。ランチはデスクですませた。エイヴアリー・トラーは、使いの用事があるときやファイルを運んだりするとき、法廷への出頭を必要とするときなどの場合は、ほかのアソシエイトにいつけた。ミッチはオフィスから一步も出ないも同然だった。この四メートル四方の聖域にこもっているかぎり、タランスとて手は出せない。よしんばここに来られたところで、廊下に出るとか、洗面所なりコーヒールームなりに逃げこめばいい。監視されていることには確信があった。だれが監視しているのかは特定できなかったが、それでも数名の集団が自分の一挙手一投足に多大な関心をいだいているのは感じとれた。そのためミッチはデスクにかじりつき、大半の時間はドアも閉めきつて、一心不乱に仕事に打ちこみ、報酬請求時間を突拍子もない数字にまで上昇させた。忘れたかった——このビルには五階があり、その五階には人でなしのデヴァッシャーという悪党がいて、自分の人生を破滅させかねない写真のコレクションをたくわえているという事実を。

なにも起こらない日々が過ぎていくにつれ、ミッチはますます自分ひとりの療養所に閉じこもるようになった。韓国人経営の靴屋くつやでの一件でタランスが怖おじけづいたか、あるいはあれを理由に罷免ひめんされたのではないかという希望が、日ましにふくらんできた。ひよつとしたら、ヴォイルズは作戦すべてをきれいさっぱり忘れてしまい、自分はこのまま金持ち街道をまっしぐらに進んで、いずれはパートナーに昇進し、目についた品を片はしから買える身分になるのではあるまいか。だが、それを本気で信じるほど無知なミッチではなかった。

アビーにとって家は、たとえ出入り自由とはいえ、牢獄ろうごくにほかならなかった。学校で仕事をする時間が多くなり、商店街で多くの時間をついやすようになり、やがて一日にいちどはかならず食料品店にも出かけるようになった。あらゆる人間に——とりわけ、自分のほうを見ているダークスーツ姿の男に目をくばった。相手に目を見られないように、黒のサングラスをかけた。雨の日にもサングラスをかけた。夜遅くひとりで食事を取りながらミッチの帰りを待つときには、ただじつと壁を見つめて、家捜しやさがをしたい誘惑をこらえていた。導線やマイクは見えないようになっていくに決まっている。そういった機器の見わけがつけられるように、その種の本を買おうと思ったこともいちどや二度ではないが、ミッチに禁じられていた。盗聴器は家のなかにあるに決まってる。ミッチはそういった。もし見つけだそうとすれば、潰滅かいめつ的な結果を招きかねない。

そのためアビーは、自分が踏みにじられているような思いをいだきながら、息を殺して自分の家のなかを歩きまわった。いつまでもこんなことをつづけるのは不可能だった。ふたり

とも、ふだんどおりの行動をして、ふだんどおりに話をするのが重要だとはわかつていた。ふたりはなんとか、きょう一日の出来ごとやオフィスでのこと、アビーの生徒のこと、天気のこと、そのほかあれこれの一般的な話題をつづけようと努力した。にもかかわらず会話は平板で、むりのある張りつめたものになりがちだった。ミッチのロースクール時代には、ふたりは自由奔放な愛の行為をひんぱんに重ねていた。それもいまは、実質上なきにひとしい。だれかがきき耳をたてている……。

深夜の近所の散歩が、ふたりの習慣になった。毎晩急いでサンドイッチの食事をすませると、ふたりは運動が必要だというあらかじめ練習したせりふをしゃべって、表の道路に出る。手をつないで冷たい夜気のなかを歩きながら、ふたりは事務所とFBIのどちらをとるべきかを話しあった。結論は、いつもおなじだった。逃げ道はない。皆無。そうやって十七の間と十七の夜が過ぎていった。

十八日めには、あらたな展開がおとずれた。午後九時になつて疲労困憊こんぱいしたミッチは、家に帰ろうと決心した。十五時間半というもの、休みなしにぶつつづけに働いていた。それも時間あたり二百ドルで。いつものようにミッチは二階の廊下を歩いていき、階段で三階にのぼった。なにげなく歩きながら、だれが残業をしているのかを見てまわる。三階は無人だった。階段でさらに四階まであがり、なにかを捜しているふりをしながら、広々とした四角形の廊下を歩いていった。照明がついている部屋が、ひとつだけあった。ロイス・マクナイトが遅くまで働いているのだ。ミッチは姿を見られずに、マクナイトのオフィスの前を素通り

した。エイヴァリー・トラーのオフィスのドアは閉まっていた。ドアのノブをつかんでみる。鍵がかかっていた。それから廊下の先の図書室に足を運び、必要でもない本を捜した。二週間ほど、こうしたなにげない夜の事務所散歩をつづけても、廊下やオフィスの天井には監視カメラは見つからなかった。連中は、きき耳をたてているだけだ。見てはいないにちがいない。

ミッチは正面ゲートのダッチ・ヘンドリクスにおやすみのあいさつをして、車で帰宅した。アビーは、こんな早い時刻に夫が帰ってくるとは予想もしていないだろう。ミッチは静かにカーポートのドアの鍵をあけて、キッチンにすべりこんだ。明かりのスイッチをいれる。アビーは寝室にいた。キッチンと書斎のあいだは小さな玄関ホールになっていて、ロールトップ・デスクがおかれている。アビーはこのデスクに、その日の郵便物をおいていた。デスクにそつとブリーフケースをおいた瞬間——それが目に飛びこんできた。黒いフェルトペンでアビー・マクデューアという宛名あてなが書かれた大判の茶封筒。差出人の名前はない。封筒には大きな黒い文字で、《写真在中 折曲厳禁》と書きなぐつてある。最初に心臓がとまり、つぎに呼吸が停止した。封筒をわしづかみにする。封は切られていた。

ひたいにどつと汗がふきだしてきた。口のなかは干あがり、唾つばを飲みこむことさえおぼつかない。再開した鼓動は、削岩機なみの音をたてている。呼吸は苦しく、痛みさえともなっていた。眩暈めまいがした。ミッチは封筒を握りしめたまま、ゆっくりとあとじさつてデスクから離れた。アビーはベッドに横になつてゐるんだ。傷ついて……吐き気をもよおし……うちひし

がれ……怒り狂ってるにちがいない。ミッチはひたいの汗をぬぐって、落ちつきをとりもどそうとした。男らしく敢然と立ちむかえ。そう自分を叱咤する。

アビーはベッドに横になり、テレビをつけたまま本を読んでいた。犬は裏庭に出ている。ミッチが寝室のドアをあけると、アビーは恐怖にかられた表情ではね起きた。あやうく侵入者にむかって悲鳴をあげそうになり、寸前でミッチだとわかったらしい。

「ミッチ……驚かさないでよ！」

恐怖に光っていた瞳が、うれしそうな光を帯びた。泣いていた目ではない。アビーの目はいつもどおりだ。苦痛の色も、怒りの炎もない。ミッチはことばをうしなつた。

「なんで帰ってきたの？」アビーはベッドに起きあがってたずねた。顔には笑みがうかんでいる。

笑み？

「ぼくの家だからね」ミッチは弱々しい声でいった。

「なんで電話してくれなかったのよ」

「家に帰るのに、いちいち電話をしなくちゃいけないのかい？」ミッチの息づかいが、ほとんどふだんどおりに回復していた。アビーはなんともない！

「電話をくれればよかったのに。さあ、早くこっちに来てキスして」

ミッチはベッドの上にかがみこんで、アビーにキスをした。それから封筒を手わたしながら、なにげない口調でたずねてみた。「これは？」

「ききたいのはこっちよ。わたしあてに来たんだけど、なんにもはいつてなかったの。なんにもなし」アビーは本を閉じて、ナイトテーブルの上においた。

なんにもはいつてなかった！ ミッチはにつこりと笑うと、またアビーにキスをした。

「だれかから写真が送られてくることになってたのかい？」となにくわぬ顔できく。

「まったく心あたりがないの。なにかのまちがいね」

いまこの瞬間、五階で高笑いをしているデヴァッシャーの声が耳にきこえてくるようだった。あのでぶの人でなしは、電線や機械がぎっしり詰まった五階のどこぞの薄暗い小部屋に立ちはだかり、ボウリングのボールなみに巨大な頭いっぱいにヘッドフォンをひろげた姿で、とめどもなく笑いこぼしているにちがいない。

「妙な話もあったもんだな」ミッチはいった。アビーはジーンズをはいて、裏庭を指さしている。ミッチはうなずいた。単純なサインだった。パティオの方角をすばやく指さすか、ちよつと首を動かせば、それで意志が通じる。

ミッチはロールトップ・デスクの上に封筒をおいて、つかのま表面ののたくったような手書き文字に指先をふれてみた。おそらくデヴァッシャー自身の筆跡だろう。あの男の哄笑こうしょうが耳にとどいてくるような気分だった。あの太った顔と下卑た笑みが、まぶたの裏にまざまざとうかぶ。パートナー専用のダイニングルームでは、写真が一同に回覧されていたにちがいない。オリヴァー・ランバートやロイス・マクナイト、それにエイヴアリー・トラーまでもが、コーヒーとデザートをとりながら、あきれた顔でにやつきながら写真を見ている情景が

脳裡^{のうり}をよぎった。

せいぜい写真を楽しむがいいさ。裕福で幸福な、輝かしい法律家としての生活も、あますところ数カ月なんだから、せいぜいおもしろおかしく暮らすといい。

近くを通りかかったアビーの肘^{ひじ}をつかむと、ミッチは盗聴者むけのせりふを口にした。

「夕食のメニューは？」

「どうせなら外で食べない？　こんな人なみの時間にあなたが帰ってきたお祝いでもしましょうよ」

ふたりは書斎を通りぬけた。

「それはいいアイデアだ」ミッチはいった。それからふたりは裏口をくぐってパティオを横切り、暗闇^{くらやみ}のなかへとはいっていった。

「話というのは？」ミッチはたずねた。

「きょう、ドリスから手紙が来たわ。ナツシュヴィルにいるけれども、二月の二十七日にはメンフィスに帰るっていう手紙よ。ぜひあなたに会いたいと書いてあったわ。重要な用件ですって。ほんとに短い手紙だったの」

「二十七日！　きのうじゃないか！」

「そう。もうメンフィスにいるんじゃないかしら。それにしても……なにをしたがってるのかしら？」

「ああ。だいたい、どこにいるんだろう？」

「旦那^{だんな}さんがメンフィスで仕事をするという話だったけど」

「そうか。それなら、むこうでぼくたちを見つけてくれるさ」

ネイサン・ロックはオフィスのドアを閉めると、デヴァッシャーには窓ぎわの小さな会議用の丸テーブルを指さした。ともに相手をきらっているし、ふたりとも歩みよりの姿勢はいっさい見せない。しかし、仕事は仕事だ。それに、うけとる命令の出どころはおなじである。

「ラザロフから、おまえさんとふたりきりで話すようにいわれてね」とデヴァッシャー。「この二日ほど、ラスヴェガスでラザロフといっしょだったんだ。やつこさん、えらく心配してたな。いや、全員が心配してるよ。ラザロフは、ほかのだれよりもおまえさんのことがお気にいりでね。ことによると、このおれさまより、おまえさんのほうを信頼してるみたいだ」

「うなずける話じゃないか」ロックはにこりともせずに行った。目の周囲の黒ずんだ皮膚にさざ波が走り、瞳がじつとデヴァッシャーの顔に焦点をあわせている。

「それはともかく、ラザロフから話しあえといわれたことがあってね」

「きこうじゃないか」

「マクデューアはうそをついてる。ラザロフがFBI内部に手先をもぐりこませてると吹聴^{ちよう}してるのは知ってるな？ ま、おれはあの若僧^{ちよう}をてんから信用してないし、いまだって多

分に疑わしいと思ってる。それに、ラザロフがささやかな情報提供者からの話としてきかせてくれたんだが、マクデューアと数名のFBIの重鎮連中が、この一月に会っていたらしいんだよ。あの若僧がワシントンに行ったときのことだ。おれの部下も出張^でったが、こっちはなにも目撃しちやいない。といっても、見とがめられずに二十四時間だれかを監視するのはできない相談でね。マクデューアがこっちの目をかすめて、ちよいと抜けだしたというのは、あながち考えられぬでもない」

「じゃ、信じてるんだな？」

「信じてるかどうかは重要じゃない。ラザロフが信じてる。だいじなのはその点だ。とにかくラザロフはおれに、マクデューアの若僧のことを……その……前もってなんとかしろといってるんだよ」

「なんだと！ しじゅう、だれかを殺しつつけるわけにもいかんだろうが！」

「転ばぬ先の杖^{つえ}ってやつだよ。深刻な話じゃない。ラザロフには、こういつてやったんだ。

まだ早すぎるかもしれないし、ことによったら勘^{かん}ちがいかもしれないってね。それでも連中は、みんなひどく心配してたぞ」

「あんなことをつづけるわけにはいかないんだよ。ええい、くそ！ どんな風評が立つかも考えないといかん。死亡率でいえば、石油掘削現場よりも高いんだぞ。いずれは人のうわさになるに決まってる。まともな頭脳をもった法学生なら、うちの事務所になど就職を希望しないような状況になりかかってるんだ」

「そのことなら、心配は無用だぜ。ラザロフは、新規採用を凍結する意向だ。おまえさんに伝えてくれとのことだったよ。それから、まだ事情に暗いアソシエイトが何人いるのかわかりたがってた」

「五人だと思うが……リンチとソレル、バンティン、マイヤーズ……ええと、それにマクデイーアだ」

「マクデイーアは除外しろ。マクデイーアがこっちの予想以上に知識があるということを、ラザロフは疑ってないからな。ほかの四人がまったく知らないのはたしかなんだな？」

ロックはつかのま考えこみ、やがて口のなかで不明瞭につぶやいた。「とにかく、四人にはなにも話してない。きみの部下が連中を監視して、盗聴してるんだろう？ なんの話をしてるんだ？」

「あの四人からは、これといった話はきこえてこないね。口調からするとなにも知らないようだし、怪しんでいるそぶりも見せてない。解雇できるか？」

「解雇だと！ あの四人は弁護士だぞ。弁護士を解雇するのは不可能だ。この事務所の忠実なメンバーなんだから」

「その事務所自体が変わりつつあるんだよ。ラザロフは、なにも知らない連中をクビにして、新人の採用をやめたがってる。FBIが戦法を変えてきたのは明白だし、となれば、こっちだって変わる潮時つてもんだ。ラザロフは体制見なおしと、欠陥修復を望んでる。おれたちとしても、連中が若いのをつまみ出していくのを、指をくわえて見てるわけにはいかんだろ

うが」

「クビにする、か」ロックは信じがたい思いでくりかえした。「この事務所が弁護士を解雇した例は、ただのいぢどもないというのに」

「涙が出るほど感動的じゃないか。これまで都合五人を殺していながら、解雇者はひとりもないとはね。最高だ。ともかく期限は一カ月。だから、いまから理由をひねりだしておいたほうがいい。おれとしちゃ、四人まとめてクビ切りをおすすめるね。大口取引先をうしなったから、人員削減もやむなしとかいってな」

「われわれには依頼人はいるが、取引先などは存在しない」

「わかった、わかったってば。その筆頭依頼人が、リンチとソレル、バンティンとマイヤーズをクビにしろといってきたってんだ。計画を立てようじゃないか」

「マクデューアをクビにせず、どうやってほかの四人をクビにするというんだ？」

「それを考えるのが、おまえさんの役目だろうよ。期間はひと月ある。その四人を追っ払って、新人はもう雇わないことだな。ラザロフが願ってるのは、信頼できる連中で固めた小規模な所帯だ。やつこさんも怯^{おび}えてるんだよ。びびって、怒り狂ってる。かりにあんたの部下のひとりがゲロった場合、どんなことになるかはいうまでもあるまい」

「ああ、いわれなくなつてわかる。それでラザロフは、マクデューアをどうするつもりなんだね？」

「いまのところはなににもせず、従来どおりの作戦でいく。二十四時間盗聴はつづけてるが、